ASD 児におけるソーシャルスキルトレーニング絵カードを使用した効果的な指導方法の検証
――言語面への効果を中心に――

Social Skills Training for ASD Children Verification of Effective Teaching Methods Using Picture Cards-Focusing on Linguistic Effects

清水　友康
Tomoyasu Shimizu

はじめに

自閉症スペクトラム症児（以下、ASD 児）は、言語表出、言語理解、コミュニケーションなど言語面での苦手さがあることが知られている。本研究の目的は、言語面において苦手さを示す ASD 児の男児 1 名に対して、ソーシャルスキルトレーニング絵カード（以下、SST カード）を使用して、効果的な指導方法を検証することである。本児の言語面での特性については、言語・コミュニケーション発達スケール（以下、LC スケール）を用いて、言語表出、言語理解、コミュニケーションの 3 領域及び検査時の応答内容から判断した。判断内容については 2 名の臨床心理士により妥当性を確保した。SST カードを用いての指導を 4 カ月間実施した後に、再度 LC スケールを実施した。LC スケール及び日常生活場面での事例より、SST カードを使用した効果的な指導方法という観点から考察された。

方法

対象児プロフィール

本研究では、軽度の自閉スペクトラム症と診断された T 児（男児）の 1 歳 6 ヶ月健診から 3 歳児クラスで保育園生活を開始した、201X 年 4 月までの内容について、母

親のインタビューから日常生活、療育場面、さらに各種検査結果に基づき、言語面を中心に本児のプロフィールとしてまとめた。さらに、その後に受けた心理検査結果も合わせてまとめた。（表 1）

倫理的配慮

保護者に対して、研究の目的及び内容を口頭で説明し同意を得た。また、研究結果を公表するにあたり、保護者から了承を得た。

指導に用いた教材

本指導で用いた SST カードは、「ソーシャルスキルトレーニング絵カード―連続絵カード幼年版 3　対人・社会性」「ソーシャルスキルトレーニング絵カード―連続絵カード幼年版 4　対人理解①（言語と反応の対比）」「ソーシャルスキルトレーニング絵カード―連続絵カード幼年版 5　対人理解②（言語と反応の対比）」である。本教材を用いた理由として、本児の言語面の特性について LC スケールを用いて検証した結果、LC スケールにおける言語表出、言語理解、コミュニケーションの領域別 LC 指数及び応答内容より妥当な教材と判断したためである。判断内容については 2 名の臨床心理士により妥当性を確保した。

３種類の SST カードは、すべて 3 枚の絵カードで場面が構成されている。場面にそって、「ソーシャルスキルトレーニング絵カード―連続絵カード幼年版 3　対人・社会性」においては、絵カードに対して「①なにをしている？」「②つぎに、どうした？」「③どうすればよかった？」と質問する構成となっている。また、「ソーシャルスキルトレーニング絵カード―連続絵カード幼年版 4　対人理解①（言語と反応の対比）」及び「ソーシャルスキルトレーニング絵カード―連続絵カード幼年版 5　対人理解②（言語と反応の対比）」においては、絵カードに対して「①こんなとき」「②こうするよりは」「③こうしてみては？」と質問する構成となっている。教示を基本とし、本児の正否にかかわらず必ず絵カードの正答を補足するとともに、絵カードの状況を説明する補足も行った。

期間及び場面

本児自宅のリビングルームにて、201X 年の 5 月～201X 年の 8 月の 4 カ月間実施した。週に 5 日、10 分から 15 分程度の時間を要して 3 種類の SST カードにおける、手順に従って実施した。

表 1　本児プロフィール（1 歳 6 カ月～3 歳 10 カ月）

月齢	母親インタビュー	心理検査等
1 歳 6 カ月	・共同注意はしていた。 ・意識して「それとって」などを伝えていた。模倣が遅かった。	・1 歳 6 カ月健診では、有意味語が 3 語言えずに経過観察となる。
2 歳	・多動なためテレビを観せることが多かった。テレビを見ている間は静かだった。	・保健師から電話連絡があり、言葉の様子などを聞かれ、1 歳 6 カ月健診時とあまり変わりがないことを伝える。保健センターに行くこととなる。
2 歳 2 カ月	・公園に連れて行き、ブランコを見つけるとやりたくて待っていられず、癇癪がすごかった。	・保健センターでは保健師が本児の対応し、臨床心理士が行動観察と親面接を行う。経過観察となる。
2 歳 8 カ月	・姉の幼稚園の保護者会に参加する。他の親御さんの所をぐるぐると行ったり来たりしていた。	・保健センター来所（2 回目）。療育センターを勧められる。 ・心理検査（表 2）を受ける。 ・ことばの検査（表 3）を受ける。
月齢	**母親インタビュー**	**集団療育場面**
2 歳 11 カ月	・言葉の遅れ、自己刺激行動（顎を自身の手の甲で打ち付ける）、偏食が見られた。 ・外出前はいつも、帽子、カバン、着る服などにこだわりごねたりした。	・集団療育に通い始める。
2 歳 11 カ月	・集団療育（親子通園）を通い始めたころは、部屋に入ることもしたがらず、抱っこを求めることが多かった。抱っこすると母親の肩に顎をぶつけてくることが多かった。	・個別支援計画書作成（201X 年 4 月～201X 年 9 月）（表 4）
3 歳 6 カ月	・夏を過ぎたころから、集団療育場面での会に落ち着いて参加できるようになってきた。しかし、自分が興味のある事ややりたいことは我	・個別支援計画書作成（201X 年 10 月～201X+1 年 3 月）（表 5） ・心理検査（表 6）を受ける。

	慢できず、大人に抑えられふんぞり返ることもしばしばあった。	
4 歳	・園では自己刺激行動などが友だちや保育者に対して見られていた。	・心理検査（表 7）を受ける。

表 2　【心理検査結果】新版 K 式発達検査 2001　生活年齢　本児：2 歳 8 カ月

領域	発達年齢（DA）	発達
姿勢・運動領域	3 歳 1 カ月	113
認知・適応領域	1 歳 11 カ月	70
言語・社会領域	1 歳 5 カ月	53
全領域	１歳１１カ月	69

表 3　【ことばの検査結果】　生活年齢　本児：2 歳 8 カ月

所見
・聴力検査の際も言語評価の際も、本児の関心があることや分かりやすいことに大人が合わせると、かかわりが成立しやすいようです。しかし、逆に本児にとって分かりにくいことや思っていたものと違うことに注意を向けるということは苦手なようでした。
具体的なかかわり
・大人と相互のかかわりを楽しみ、分かり、深めていく。 ・言葉の理解を深めていきましょう。広げていきましょう。例えば…自分のものの片づけ、ごく簡単な手伝いなど。 ・ものを示すとき、口元というか顔のそばで見せるようにしましょう。

表 4　個別支援計画書（201X 年 4 月～201X 年 9 月）

	項目	支援目標	実施状況・全体評価	今後の支援について
1	遊び	大人と一緒に様々な遊びを経験し、興味・関心の幅を広げ、楽しむ。	・クラスが始まった当初は、部屋の中で過ごすことが難しい姿がありましたが、場所や人に慣れて、室内の玩具で遊んだり、あつまりなどの活動を楽しむ姿が増えてきました。	・概ね目標は達成しています。今後は、新しい活動をする際には、写真や絵で具体的な見通しを持てるように支援することで、参加意欲が高まるようにしていきます。また、無理強いはせず、様子を見てイメー

			・集中が続かないこともありますが、見通しを持つことで気持ちを切り替えたり、興味をもって最後まで参加できることが増えました。	ジを掴む時間を持てるように呼ぶ順番を配慮し、安心して参加できるようにすることで参加できる活動が増えるようにしていきます。
2	言語	思いをジェスチャーや言葉で伝える。	・思いを上手く表現できないと行動で示すこともありますが、表現に興味は持ち始め、大人にジェスチャーを交えた言葉で要求したり、やりとりを楽しんだりする様子が見られるようになりました。	・今後も、思いに寄り添い、代弁することで、思いと言葉の意味を繋げ、表現のバリエーションを増やしていきます。また、意欲的に表現し、大人に何かを伝えようとしている時は、大いに褒め、受け止めることで表現することの喜びを感じられるようにしていきます。
3	情緒	一緒に遊ぶ楽しさを大人と共有する。	・保護者だけでなく、職員や友だちの保護者等にも関わろうとする姿が増えてきました。好きなものを相手に見せて、どんな反応をするのか期待している姿が見られます。	・今後も、遊びの中で色んな大人とふれあったり、一緒に遊んだりすることで、「この人といると楽しい」と相手との関わりを求める気持ちを育んでいきます。

表 5　個別支援計画書（201X 年 10 月～201X+1 年 3 月）

	項目	支援目標	実施状況・全体評価	今後の支援について
1	遊び	色々な活動に参加する。	・初めての活動では様子を見ていることもありますが、友達がやっている姿を見て、イメージを掴み、参加できることが増えました。泥遊び等の	・初めての場面では周りの様子を見て見通しを持てるような時間を設けられると良いと思います。また、参加したい気持ちが強いと、行動が優先されやすいですが

			感触遊びの際は汚れを気にすることもありますが、道具を介したり、直ぐに手を拭いたり洗える環境にすることで取り組む様子が見られています。	大人が状況を説明したり、目で見て分かりやすい手がかり（順番表や役割表）を使うことで気持ちを切り替えていかれると思われます。
2	言語	思いをジェスチャーや言葉で伝える。	・思いが伝わらないと感じると行動で示すこともありますが、ジェスチャーや言葉を組み合わせ、何とか思いを伝えようとする様子が見られます。また、表情も豊かになり相手に伝える喜びを感じている姿が増えました。	・思いが伝わらずもどかしい時は、大人が思いに寄り添い、代弁することで相手に伝わる表現を身につけていかれると良いと思います。表現に対して大人が共感していくことで伝える意欲や楽しさを味わっていかれると良いと思われます。
3	情緒	一緒に遊ぶ楽しさを相手と共有する。	・物の貸し借りには難しさがありますが、友だちに興味を持ち、同じ空間に友だちが来ることを受入れ、玩具を共有できることが増えました。また、友達の名前を呼び、遊びに誘う姿が見られます。	・今後も、友達と同じ空間で遊ぶ機会を多く設け、その中で大人が介入し、遊びの級友や貸し借り等、様々な関わり経験を積んでいかれると良いと思います。また、その中で様々な感情に触れ、自分の気持ちや他者への気持ちに気づき、かかわっていかれると良いと思います。

表 6　【心理検査結果】新版 K 式発達検査 2001　生活年齢　本児：3 歳 9 カ月

領域	発達年齢（DA）	発達
姿勢・運動領域	3 歳 1 カ月	81
認知・適応領域	2 歳 7 カ月	68
言語・社会領域	2 歳 4 カ月	62
全領域	2 歳 6 カ月	66

表 7　【心理検査結果】新版 K 式発達検査 2001　生活年齢　本児：4 歳 9 カ月

領域	発達年齢（DA）	発達
姿勢・運動領域	3 歳 10 カ月以上	検査上限
認知・適応領域	3 歳 10 カ月	80
言語・社会領域	3 歳 4 カ月	70
全領域	3 歳 7 カ月	75

結果

LC スケール

以下、指導前（表 8）及び X 年の 5 月～X 年の 8 月の 4 カ月間の指導後に実施した LC スケールの結果である。総合得点とは、各検査項目に設けられている得点を合計したものである。LC 年齢(LCQ)は、粗点を年齢的な尺度で表したものである。LC 指数(LCQ)は、異なる年齢階級や領域の間で比較できるように基準化された換算点である。[1)]

表 8　【LC スケール領域別結果と評価時の様子】　生活年齢　本児：4 歳 11 カ月

総合得点	82
LC 年齢(LCQ)	3 歳 10 か月
LC 指数(LCQ)	80
所見	・理解と表出について、日常生活の中で使用される言葉についてはよく理解し、さらに表出できる様子が見られた。 ・課題 45 における状況画の理解では、絵に描かれている事実だけを話す傾向が見られた。

表 9　【LC スケール領域別結果と評価時の様子】　生活年齢　本児：4 歳 11 カ月

総合得点	90
LC 年齢(LCQ)	4 歳 2 カ月
LC 指数(LCQ)	77
所見	・日常生活の中で聞いたことのある言葉や経験したことのある言葉は、理解と表出ができるが、応用するのは難しい姿が見られた。 ・課題 45 における状況画の理解では、日常生活の中で経験したことのある内容と状況画を照らし合わせ、実体験に基づいて答えている姿が見られた。

日常場面における評価

家庭において、SST カードを用いた指導法の有効性について母親にインタビューを実施した。その結果、SST カードの正答を示す言葉を使用する姿が見られるようになったとのことである。一方で正答ではなく SST カードの場面の中で人物が使う不適切な言葉の使用も見られるようになったとのことである。これらについては、本児が通う保育所の保育士からも同様の報告があった。以下、SST カードを用いての指導後に見られる、自宅場面及び保育所にて、本児の使用した言葉について事例を挙げる。

【事例 1】　正答を示す言葉を使用（自宅）

・姉と遊んでいる際に、本児がリビングを走り誤って、姉が遊んでいたブロックを壊してしまうと、自発的に「ごめんね」という言葉の使用が見られるようになった。

【事例 2】　正答を示す言葉を使用（自宅）

・姉と父親が身体遊びをしている際に、「かわって」や「あとで、かわって」という言葉の使用が見られるようになった。

【事例 3】　正答ではなく、場面の中で人物が使う不適切な言葉の使用（自宅）

・姉とのブロック遊びの際に、姉にブロックを取られると「やめろばか」と答えていた。

【事例 4】　正答ではなく、場面の中で人物が使う不適切な言葉の使用（自宅）

・姉と遊んでいる際に、本児が使いたいブロックが使えないと「おまえがわるい」という言葉の使用が、多く見られるようになった。

【事例 5】　正答を示す言葉を使用（保育所）

・登園して、友だちが先にかるた遊びをしていて、友だちが本児に参加するか尋ねた際、「みているだけ」と答えていた。

【事例 6】　正答ではなく、場面の中で人物が使う不適切な言葉の使用（保育所）

・友だちとのかかわりの中で、本児の思い通りにいかない場面があると、「おまえがわるい」などの使用が見られた。

考察

本研究では、軽度の自閉スペクトラム症と診断された T 児（男児）に対して、SST カードを使用して、効果的な指導方法を検証した。LC スケールの結果において、LC 指数(LCQ)はやや下降しており SST カードを使用して、4 カ月間における言語面を指導することの有効性は確かめられなかった。所見においては、「日常生活で使用される言葉の理解と表出は可能だが応用が苦手」「状況を理解し適切な表現に応用することが苦手」という結果が得られた。

一方で、日常生活における母親のインタビュー及び保育所の本児の様子からは、SST カードを使用して、効果的な指導方法に関連する知見が得られた。自宅における正答を示す言葉の使用については、SST カードでは、事例 1 は、「男の子が女の子にぶつかってしまい、ごめんね」という場面で構成されている。事例 2 は、「男の子がブランコで遊んでいて、“かわって”といって代わる場面」で構成されている。本児も自宅場面において、類似の状況に対して、正当を示す言葉の使用が見られた。また、保育所における正答を示す言葉の使用については、事例 5 は、「男の子がドミノで遊んでいて、もう一人の男の子が“みているだけ”」という場面がある。実際の正答はドミノで遊んでいる男の子が、みている友だちに対して“さわるなあっちにいけ”ではなく、“たおれないように、はなれてみていて”」という場面で構成されている。SST カードとして求められている正答ではないが、状況に対して適切な言葉の使用という判断をし、正答を示す言葉の使用とした。

一方で、正答ではなく、場面の中で人物が使う不適切な言葉の使用については、自宅においては、事例 3、事例 4、保育所においては、事例 6 において見られた。いずれの言葉も SST カード場面において、正答ではなく人物が使う言葉である。事例 4 及び事例 6 で使用されている「おまえがわるい」という言葉は、自宅でも保育所でも共通して使用する姿が見られた。

以上のことから、日常生活で日頃から経験したことのある場面については、場面の

状況を含んだ理解及び表出が可能であり、日常生活でも適切な使用が可能であることが伺えた。一方で、日常生活で経験が少ない場面においては、場面の状況を含んだ理解及び表出が困難であり、その結果日常生活でも適切な使用が困難になることが伺えた。以上のことから、SST カードを使用して、効果的な指導方法として、対象児の日常生活での経験を理解した指導方法が有効だということが示唆された。

引用文献

1）大伴　潔・林安紀子・橋本創一・池田一成・菅野　敦．（2013）．*言語・コミュニケーション発達スケール LC スケール増補版*．株式会社学苑社．95－96．

参考文献

龔　麗媛・河南佐和呼・真名瀬陽平・野呂文行．（2016）．自閉スペクトラム症児における状況に応じた感情語の選択指導．*障害科学研究*．40．199－207．

原口由美・笠井新一朗・塩見将志・稲田　勤・山田弘幸・長嶋比奈美・石川裕治・福永一郎．（1999）．音声言語による言語表出に遅れを示した―言語発達遅滞児について．*高知リハビリテーション学院紀要*．1